飜刻

新体詩歌

竹内隆信編輯

第二集

新体詩歌第二集

目次

勸學の詩
春夏秋冬の詩
カムフヘル氏英國海軍の詩
シャール、ドレアン氏春の詩
西詩和譯
刺客を詠するの詩
外交の歌
俊基朝臣東下り
藤袴の歌
小督の歌

東の花
長恨歌
櫻狩
芙蓉を詠するの歌
西行の歌
以上十五篇

新体詩歌第二集

竹内節編輯
矢田部良吉

勸學の詩

昔し唐土の朱文公よに博學の大人ながら
わが學問をすゝめんと少年易老の詩を作り
一生涯は春の夜の夢の如しと嘆きけり
國の東西世の古今人の高卑を問はずして
學の道に就くものはいかに才能ありとても
同し多少の感慨を起さぬことのあるべしや

春の初花秋の月　夏のみどり葉冬の雪
都て此世の物事に　心をとむる時あらば
わが學藝を省りみて　過る月日を思ふべし

池のみぎはの春草は　みじかき夢を覺ぬまに
軒端に茂るきりの葉は　吹く秋風にさそはれて
此年も半ば過ぬるを　ふみ讀む人はしらずやは

年の月日は長けれど　難波入江の村あしの
ひとよの如く思はれて　我身の上のはづかしさ
螢や雪の光りにて　ふみは讀めども業ならず

昔の人の學問は　唯一すぢの道なれど
なほ賢人の嘆きあり　今は學術多端にて
枝に小枝に末葉まで　いかで凡夫の能すべき

さは云ふものゝ諺に　山のはじめは一塊土
海のはじめはひとしづく　いかに急げど詮はなし
心をこめていつまでも　怠らぬこそよかりけれ

たとひ多くにわたらぬも　唯一藝を修めなば
身の爲となる多からん　蜘蛛に藝あり網をはり
蜂に能あり蜜つくる　何とて蟲に及ばざる

勉め勉めよたゆみなく　進み進めよよどみなく
難き事とて厭ふなよ　學の海に舟路あり
敎の山にしをりあり　丈夫何かは怯るべき

春夏秋冬の詩

矢田部良吉

此詩は句尾の二字を以て二句づゝ韻を踏みたるものなり例へば「よろこばし」「暖かし」の如し

春は物事よろこばし　吹く風とても暖かし
庭の櫻や桃のはな　よに美しく見ゆるかな
野邊の雲雀はいと高く　雲井はるかに舞ひて鳴く

夏は木草の葉も茂り　百日紅も咲きにけり
夕暮かけて飛ぶ蟲は　集まり來る軒のきは
人は我家を立出でゝ　なほ涼むらんさよふけて

秋は尾花にをみなへし　桔梗の花も開くべし
晴れて雲なき青空に　照らす月影明かに
されど何處も同じこと　寂しく見ゆる家の外

冬は雪霜いと深く　冷ゆる手足を暖く
なさん爲とて爐火(いろり)に　近く圓居(まどい)をする時に
風はふき入る戸のあはひ　外の方見れば銀世界

○カムブベル氏英國海軍の詩　矢田部良吉

イギリス國の海岸を固く守れる水兵よ
一千年のそのあひだ汝が建つる大旗は
戰爭のみか嵐しをも支へ得たれば此後も
敵を受くともたゆみなく勇氣の限りひるがへせ
軍烈しくあらばあれ嵐も強く吹かば吹け
立ちくる海の浪間より汝が祖先あらはれて
汝を扶けたまふべし蓋し祖先の軍艦の
其甲板はてがらの塲大海原は其墓場
大ネルソンやブレーキの死にし處は人しのぶ
軍烈しくあればあれ嵐も強く吹かばふけ

四方海なるブリタニヤとりても城も用はなし
山とたちくる波とても千尋のそこも淵とても
慣れて我家に異ならず いかづちなせる大砲を
船より放ち轟かし 波をわけつゝ進み行く
軍烈しくあらばあれ嵐も強く吹かば吹け
國の光とたてし旗益光りかがやきて
危難も都て解け去りて太平の日にもどるらん
其時汝つはものゝ いさほし譽めて諸人が
歌に唱ひて悅びて安榮限りなかるらん
烈しき軍すみし時 強き嵐しのやみし時

○シャールドレアン氏春の詩

春の景色のゝどけさを
冬は物事さびしきも
とけて樂み限みなし
人をなやますことぞなき

北風强く吹く冬は
雨もこほりていと寒く
爐火近く團居して
されど嵐も雪も歇む

曇りがちなる春の空
されど春にもなりぬれば
いかで好まぬ人あらん
春は心のをのづから
雪もみぞれもふる雨も
のどけき春の來る時は

野邊には深雪木はつらゝ
障子ふすまを建廻はし
ねぐらの鳥にことならず
のどけき春の來る時は

日影もうすく晝くらし
喜ばしくも雲はれて
光りのどけき天を見る
跡も殘らず消へうせぬ

いぶせく降りし雪霜は
のどけき春の來る時は

C西詩和譯

坪井正五郎

いきの出入りとからだの血　しかのみならずよき心地
清きたましひくれ命　時計のめぐりはやくたち
遽に變る針の位置　歳はすぐともわざとさち
なきは則ち無能無智　多く考へ氣をたもち
よきはたらきを爲せる後　長しと言はんこのいのち

井上巽軒曰。押韻自在。可喜。又曰。學者曰誦之以自勗。則其進歩可斯而竢也。

○刺客を詠する詩

大學のはかせたちのものせられたる新體詩抄の體に倣ふ

八門奇者

天を仰けばいと廣し。地見わたすも亦廣し。その中に住む人にして。なとか心の狹かりし。」狹き心の一筋に。此の人有らば世の爲に。ゆゝしき事や起らんと。思ひわびけん朝夕に。」やがて病にかこつけて。勉めしわざも打棄て。時は花散る春風のなごやの里に歸り來て」。それと言はねど父母よ。是が此の世のお別よ。厚き惠も報い得ず先たつ罪は免してよ」。うからはらから友がきに。告げんとすれど告げがてに。おもひ煩ひかき殘す。心は盡きず執る筆に。今日春雨のふる里も。はやたち出る旅ごろも。頃も經ずして稻葉山。ふもとに着きぬ嬉しく

も。識る人とてはながら川。おもふかたきにあふ瀬をば。尋ね問ふべきよしもがな。とく揮はましこの白刃」。憎さも憎しかのかたき。非ぬ望みを胸におき。下なる民をそゝのかし。上の掟を言ひあばき」。上を崇むる人をしも」。諛ふものと謗れども下にへつらひ民にこび。ねぢけいでたる彼等ども」。佐賀に起りし箭さけびも。長門に降りし火の雨も。薩摩の瀬戸に幾千々の。人を沈めし浪風も」。うたてくはあれど君がため。高麗もろこしも討鎭め。國のみいつを振はんと。思ふ餘りの其の結句」。憎むべしとも覺ゆれど。思ひかへせば可惜ひと。是に引きかへ彼のともは。世の正道を亂さんと。」彼の蠢けき佛蘭西の。血の波たちし禍津世の。首斬り臺に國王を。ひきすへたりし當時の」。いと淺ましくふるまへる。あとに心やとまりぬる。口をひらけば

鮮血もて世を洗はんと叫ぶなる」。かゝる勢ひつのりなば」危からまし大君は」。いで大君の御爲に斫り斃してん彼の人は」。さはさりながら彼の人の。誠にかくも思へるか。附き從へるえせものゝ。妄にしかはいふなるか」とにもかくにも彼の人の。心の底を知らんとの。願ひかなひてまのあたり。ゑんせつ聞しその時の。心の中はいかなりし」。今はすこしも宥されじ隱し持ちたる匕首。袖の裏にて拔き放し」。待つとはさらに彼の人は。神ならぬ身の思はねば。鼻高からにしづ〳〵と。歸る跡より飛びつけば」。何故ありてかくすると。言はせも果てず何故と。問ふは愚よ汝こそ。今將來の國賊と。閃く刃ほとばしる。血しほも赤き心なる。此のますらをの眞心の。貫かざるが怨みなる」。よしやうらみは遺るとも。なほき其の名は世の人も。

ふみにしるして音高く。語りつぎなん千世までも」。されど敵と見ひがめし。其の紳士は世にためし。すくなきまでにあつかりき。君に忠なるこゝろざし。國につくせるこゝろざし」。

○外交の歌

屈山居士作

西に英吉利北に魯西亞。油斷な爲せぞ國の人。外表に結ぶ條約も。心の底は測かられず。萬國公法ありとても。いざ事あらば腕力の。强弱肉を爭ふは。覺悟の前のことなるぞ。嗚呼同胞の兄弟よ。御國に生れし甲斐あらば。盡せや勵め諸共に。まこゝろ込てつくすべし

○俊基朝臣東下

落花の雪に踏み迷ふ。片野の春の櫻狩り。楓の錦を着て歸る。嵐の山の秋の暮。一夜をあかす程だにも。旅寢となればものうきに。恩愛のちぎり淺からず。我が故里の妻子をば。行衛も知らず思ひおき。歳久しくも住みなれし。九重の帝都をば。今を限りと顧みて。思はぬ旅に出で給ふ。心のうちぞ憐れなり。うきをば留めぬ逢坂の。關の清水に袖ぬれて。末は山路を打ち出の濱に。沖を遙かに見渡せば。汐ならぬ海にこがれゆく。身をうきふねのうき沈み。駒を轟ろとふみならす。瀨田の長橋打ち渡り。行きかふ人に近江路や。世の畔の野に啼く鶴も。子を思ふかと哀れなる。時雨もいたく森山の。木の下露に袖ぬれて。風に露ちる篠原や。篠わける道すぎ行けば。鏡の山はありとても。涙にくれて見分たず。物の思は夜の間にも。老蘇の森の下草に。駒をとゞめてかへり見る。故里くもや隔つらん。番場鮫ヶ江柏原。不破の關屋はあれはてゝ。猶漏るものは簷の雨。いつか我身の尾張なる。熱田の八劔ふしおがみ。潮干に今や鳴海潟。傾く月に道見えて。明ぬ暮れぬと行く道の。入相なれば今はとて。池田の宿に着き給ふ。元歷元年の頃とかや。重衡中將東夷の爲め。捕はれて此の宿に着き給ひしに。

東路の羽生の小屋のいふせきに
古里いかに戀しかるらん

と長者の娘が讀みたりし。その古のあはれまで。思ひ殘さん涙なりける。旅館の燈幽にして。鷄鳴曉を催せば。四馬風に嘶いて。天龍川をうち渡り。さよの中山越え行けば。白雲道をうづみ來て。そことも知らぬ夕暮の。家鄉の天を望みても。昔し

西行法師が命なりけりと。咏じつゝ再ひ懇し跡までも。うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み。日既に亭午に近ければ。登餉する程とて。輿を庭前におろし。長柄を叩て警護の武士を近づけ。宿の名を問ひ給ふに。菊川と申すなりと答へければ。承久合戰のとき「院前に書きたりし咎に依り。光親關東に召し下されしに。是の宿にて誅せられしとき

昔南陽縣菊水酌下流延齡
今東海道菊川宿西岸終命

とかきたりし。遠き昔の筆の跡。今は我身の上に成り。あはれやいとゝ勝りけん。一首の歌を咏して。宿の柱にかけられける

いにしへも斯るためしを菊川の
同しながれに身をや沈めん

○故里の益子がもとより蘭に長歌そへておこされければ

藤田東湖

數ふれば。はや二とせの旅枕。おどろかれにし秋風も。ことしはさすが聞きなれて。うきとも知らず白雲の。棚引く間よりもる月の。かげも隅田の夕ばへを。獨りながむる蓬生に。ふる里人のおとづれて。いとめづらしき藤袴。明石も須磨もあれ庭に。時し忘れで咲きにほふ。なれが色香を言の葉に。そへてはる〳〵おこせしに。深きなさけを杯に。うけて酌みつゝ敷島の。やまとのみかは海原の。よそなる國のことまでも。思ひ渡せば世の中の。つらきためしも人の身の。ふさはぬ事もありそうみ。濱の眞砂のかずよりも。なほさはなれば君が爲め。うづもるゝ身はなには潟。あしのふしさへ中々に。よしともい

はん秋の夜の。旅のあはれもふる里の。春に逢ひぬる心地とやいはん。

○小督の歌

牡鹿なく。此の山里とゑいじけん。嵯峨のあたりの。秋の頃。ちくさの花も。さまゞに。虫の恨みも。深きよの。月にまつ虫。まねくは尾花。萩には露の。玉虫や。そよぐをぎ虫。くつは虫。啼音につれて。中國が。寮の御馬。たまはりて。とのゐすがたの。藤袴。たづねる人の。おもかげに。たつ薄霧の。女郎花。それかあらぬか。まぼろしの。蓬が島根。たづねわび。駒引とむる笹のくま息ふかげの。松風に。かよふつまおと。つまこひの。ねによる鹿に。あらねども。昔し覺ゆる。ふえ竹や。合すしらべのまがひなき。こゑをしるべに。したひよる。嵯峨の〻奥の。かたをり戸。想夫戀の唱歌は。比翼の翅の。雲井を越へ。盤渉調のしらべは。松の連理の枝にかよふ。小督の局。世を忍ぶ。すみかも。明日は。大原にかへん姿のなごりとて。よはに手習す。つまごとの。いはこす思ひ。せきかねて。涙に袖を。かゝしばや。人目も如何。あやめがた。糸の色音をしるべにて。さし入月の。雲井より。御使にまへりしとかしこき君が。詔り。野べのをちかた。わけきつゝ露の玉章。さしよする。つまごの。はしの。縁の綱。又ひき結ぶ。御還りごと。そへて給はる。いつゝ衣。きぬ〳〵送る。ほども無く。迎への車。たてまつり。昔しにかへる。百敷や。〳〵。千代を契りの松のこのは。

○東の花

吉野よく見し。人は不知。花は東まの。隅田川。よにゑぬ春の。ひとりぞや。みやことりに事問ひし。昔にはにず。渡し守。春は暇無く。みなれざほ。指して堤を。行き通ふ。人の袂の。あけみどり。柳の絲に。引かれ來て。長き日暮らし花の香を。袖にしめてはくみかはし。遊び戯れつ。たをやめの。歌ふ一トふし。ゆみならば殘らじ袖のうつり香を。如何に定めむ咲きにほふ。花の手枕ら。夢ならで。かはすもあだの花の影。流石嬉しき。ゆかりにも。紫さきおふる武藏野の。廣し惠みや。仰ぐらん。尙行末も。千代八千代。長き堤の花櫻ら。榮へ榮へん御代の春。

○長恨歌

今は昔し。唐しに。色をおもんじ玉ひける帝。おはしませしときき。楊家の娘め。かしこくも。君に召れて。朝さくれの。御寵みあさからず。常にかたはらに侍りぬ。宮の內のたをや女。三千の寵愛も。わか身ひとつの。春の花。ちりていろ香も。亡き魂の。ありかを尋ね。みなれざほ。さしてはる〳〵行く舟に。法士は浪の。うきねする。常世の國に。來て見れば。樓閣玲瓏として五雲おこり。うちになまめく女の童。ことにすぐれて。玉眞の。すがたはいづれ。李花は一枝。あめを帶びたる其の氣はひ。見るよりそれと。ことのはも。涙こほれて欄干を。ひたすもいかに。なれ染し驪山の昔し。思ひやる。あらなつかしの。都人。はづかしながら。在しよの。其のむつごとも。消へはつる。露のちぎりの。うさはらし。云ふてみよ。ならひとかたに。御思召すかや。深き江に。春の氷の。薄きは。いやよ。思ひ逢ふよは。うちとけて。寢みだれ

髪を。其のまゝに。とりつくろはぬ女きを。かあぬからんせか
らすばの。色に此の身を染め糸の。結びめかたき。かたらひも。
縁つきぬれば。いたづらに。またこの島に。かへりきて。尚なつ
かしき。古へを。思ひいづれば。あはれなる。驚破霓裳羽衣の曲
まれにそかへす乙女子が。まれにそかへす乙女子が。袖うち
ふりし心しりきや。さるにても。君には此の世。あひみんこと
も。よもぎが島つどり。うきよなれども。戀しやむかし。戀しや
昔しの物がたり。つくさば月日も。うつりまひの。しるしのか
んさし。たまはりて。都にかへる。家づとは。ふみにもまさる。ふ
み月の。七日のよはの私語。ひよくれんりも。いまはは。かれ
〳〵なりし。うきちぎり。天のとこしのなへなるも。つちの久
しく。ふりぬるも。つくるときあり。此の恨み。綿々浪々として

たへまなく。今にのこせし筆のあと

○櫻がり

長閑なる。頃もきさらき。おしなべて。見わたす山も。うちけむ
り。柳のいとの。あさみどり。春のにしきかあやなくも。都にし
らぬ。しらくもの。たてるやしるべ。櫻狩り。人のこゝろも。あこ
がるゝ。そらを見すてゝこしぢには。まつらむものを行鴈の。
かほる〳〵。翼は空にきへ。聲はあはれに聞ゆなり。行衛した
ひて。たちとまり。なごりはしばしわすれねど。初花ぐるまめ
ぐるひの。ながへつらねて。見ずもあらず。見もせぬ人や花の
友。しるもしらぬも。花の影。あひやどりして。すがのねの。長き
春日も。いたづらに。日影すごして。花ごろも。なれしたもとの
香にそみて。野邊も。山邊も。花ゆゑに。いたらぬくまは。なけれと

も。山の。屋まのいはねを。とめて落る。千すぢ。百々すぢ。佐保姫の。手びきの糸の。たきなくは手折てゆかんいりあひの。鐘よりさきに。春霞。たちなかくしそ。風は吹とも。

○芙蓉を咏ずる歌

ましろなる。たか根もはるは。さくら花。さくやひめとは。かみよの古し。神代も花のいろさかり。花のすがたのいとしらし。しんぞいとしらし。いともかしこき。人のよに。ふしもすぐなる竹取の。翁のむすめはよいむすめ。みがきたてたるかつらのまゆに。かほはてりそふ秋のよの。月にかこちて。ふるさとを。戀ひしがるやつしだふやつ。やつとやつとを。指折見れば二八十六でふみたまづさを。鴈が持てくる。雲井より。ちらと觀せたは。冬たつ天に降り來る雪の。はだじまん。これ觀よがしに。三保の松。羽衣もといふ。迷言かけた。天津乙女は。うはきのあだか。をとこひでりか。此の年月を。しづがふせやに。假り枕ら。絲も操り候。はたをり〳〵に。霓裳羽衣の。曲をなし。東まあそびの。駿河舞。雨にうるほふ。花の袖。かへすたもとに。充滿の寶らを普ねく。世にふらせ。施こしたまふ。いつくしみ。盡ぬそのなは。蓬萊の。山又玆に富士のねの。扇の裾野。末へ廣き御國の要めと。祝しけり。

○西行の歌

われもむかしはますらをの。眞弓つき弓。としをへて。引きたがへたる朝さ夕は。命ちなりけり。旅衣。こけの衣。に身をそめかへて。心のちりの。袖はらふ。やぼなせかいに。いとしごの。いとしかあいは。昔しのこと。よのよしの山。こぞのしをりの。道

かへて。また觀ぬ花の。色々を。たづね〳〵て。うた枕。ふでのすさみの。墨染櫻。うつろふ春の。花のかほ。やせるすがたに。かさきたなりを。水の鏡に。かげとめて。しばし立よる。柳かげ。

新体詩歌第二集終

明治十七年四月廿三日飜刻御届
同　年五月出版　（定價金八錢）

編輯兼原版主　和歌山縣平民　竹内隆信

飜刻人　山梨縣平民　内藤傳右衛門　西山梨郡常盤町四番地